

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成24年 9月 6日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科

職 名・学 年 博士課程3年

氏 名 栗 田 和 紀

助 成 の 種 類	平成24年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研 究 集 会 名	第7回世界爬虫両生類学会議 7th World Congress of Herpetology	
発 表 題 目	オキナワトカゲの島嶼侵入と種分化 Island Colonization and Speciation of the Ryukyu Five-Lined Skink, <i>Plestiodon marginatus</i> , in the Ryukyu Archipelago, Japan.	
開 催 場 所	ブリティッシュ・コロンビア大学 (カナダ, ブリティッシュ・コロンビア州, バンクーバー市)	
渡 航 期 間	平成24年 8月 8日 ~ 平成24年 8月 17日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	200,000円
	使用した助成金額	200,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	旅費(航空運賃):179,400円
学会参加費の一部:20,600円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 海外で開催される学会への参加はとても魅力的ですが、大学院生にとっては旅費が気になり、なかなか参加できないでいます。そんな中、貴財団の助成は様々な国際研究集会への参加を採択しており、また交付される助成金の使用範囲が広いとため、積極的に申請することが出来ました。今後も多くの大学院生の学会参加への支援をを行っていただければと思います。どうもありがとうございました。	

成果の概要／栗田和紀

平成 24 年 8 月 9 日から 13 日にかけてカナダのブリティッシュ・コロンビア大学で開催された第 7 回世界爬虫両生類学会議 (7th World Congress of Herpetology; <http://wch2012vancouver.com/>) に参加した。世界爬虫両生類学会議は、爬虫類と両生類に関する学問である爬虫両生類学について、国際的な興味を広げる機会を増やし、研究協力を促進する目的で開催されている。会議は 3-5 年おきに世界各地で開催されており、今回は北アメリカ大陸での初めての開催となった。アメリカには、爬虫類・両生類・魚類に関する 4 つの学会があり、毎年合同で大会 (Joint Meeting of Ichthyologists and Herpetologists) を開催している。今回は、これらの学会との共催ともなり、魚類の研究者も会議に参加していた。会議は 133 のセッションから成り、約 1000 題の口頭発表、約 400 題のポスター発表が行われた。また、大学院生向けのワークショップやオークションなども開催されていた。

私は、本会議にて「Island Colonization and Speciation of the Ryukyu Five-Lined Skink, *Plestiodon marginatus*, in the Ryukyu Archipelago, Japan」というタイトルにて口頭発表を行った。琉球列島の固有種であるオキナワトカゲは、琉球列島に分布する多くの陸生爬虫類の分布境界線であるトカラ構造海峡を越えてその北側の島々にも分布している。しかし、このトカラ列島北部の島々の集団の起源について詳しいことは分かっていなかった。本研究では、分子系統地理学的な解析を行い、オキナワトカゲがトカラ列島北部の島々に侵入した時期や祖先集団、侵入経路を推測した。

今回、口頭発表にした経緯には理由がある。私は、昨年初めてアメリカの合同大会に参加した。そこでは、博士課程で行ってきた研究についてポスター発表を行った。初めて海外の大会に参加するということもあり、期待を膨らませて参加した。ところが、実際参加してみると、私のポスターを見てくれたのはたった 3 人だけであった。有意義な助言を得られなかったことはおろか、説明する機会もなく何とも悔しい思いをした。来年は国際学会があることを知り、それに参加してこの思いをはらそうと、京都大学教育振興財団の国際研究集会発表助成に申請した。「聞きに来ないならば、こっちから話してやる」との思いで口頭発表にしたのである。

口頭発表で申し込んだものの、慣れない言語での発表には不安があった。英会話が苦手な私には、質疑応答にうまく対応できるかとても心配であった。それでも、とにかく自分から伝えたい内容はしっかりしたものにしようとスライドと原稿の作成に力を注いだ。そして、「自分の研究を多くの人に知ってもらおう」との思いで何度も練習し、当日の発表に臨んだ。

本大会での私の発表には、50 人は超える人が聞きに来てくれた。同じ時間帯で同時に複数のセッションが行われているので、聞いてくれた人たちは本当に僕の発表を聞きたくて来てくれたと信じている。発表は準備した通りに行うことができ、質疑応答にも

何とか対応することが出来た。そして、発表終了後には数人から声を掛けられ、詳しい議論を少しだけであるが行うこともできた。今回の大会の参加者全体に比べればわずかな人数かもしれないが、それでもたくさんの人に興味を持ってもらえたことはとても嬉しく、今後の自分の研究の励みになった。

本会議に参加して一番の目標は果たせたが、それ以外にも多くの成果があったと思う。国際会議ということもあり、世界各地の爬虫類の研究者が参加していた。そのため、発表を通してこの分野の現在の研究の方向性をつかむことができた。また、海外の大学院生と会話してみて、それぞれの国での研究の苦労話や就職事情など様々な情報交換をすることができた。また、参加者の中には、読んだことのある論文の著者らもたくさん参加していた。特別に会話する機会はなかったものの、言動や身体的特徴など論文では伝わらないことを発表を通して知ることが出来た。特に、有名な研究者の発表はシンプルなスライドでスムーズに話が進み、身振りを交えて聴衆の笑いを誘いながら話しており、今後の自分の発表の参考になった。ただし、全体的に英語が聞き取れず、詳しい部分までは理解できないのが消化不良であった。しかし、それは、次に国際会議に参加するための目標としたい。

本会議に参加し口頭発表する機会を与えていただいた京都大学教育研究振興財団に心から感謝します。本当にありがとうございました。